

手綱畵式

24
36.192

あり手綱圖式を伊勢因幡守貞常入道常安自筆
し記し置けり初め凡手綱の條やうを記ししもの
手綱腹帯條に記し伊勢貞助記大進相圖書系極大

冊子馬見を入記上賢抄大銀尚氏記弓馬圖書を
あゆむ所とされともよくて世間大座より定て記
せしかるべき圖式を正しを柳文の御手總下因
別の條より調進せしもの極年より終りて是も
習く今新しう條にふくむべき書とせしむるも
世にわたりて新不すなりとせんまゝに以て年
款をさへ置かざるに傳寫の字多とて終ひて
栗原の伝元浄字に極あり終りてよくて
てえなといふ終りと切ありえよりおれを初め
すしなまといふかひ置かざるふあはれ毛の字
けりぬり一巻の首より終りては保元平
秋のよりきけりあ讃高の治田義備なり

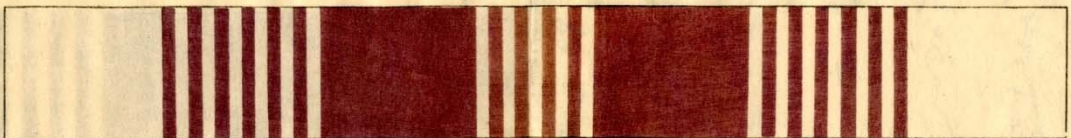
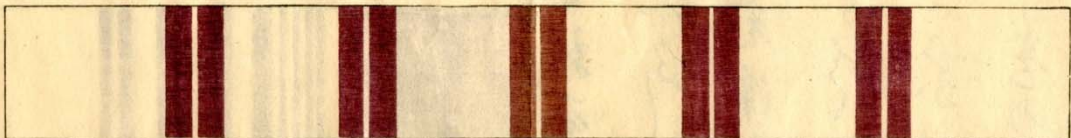
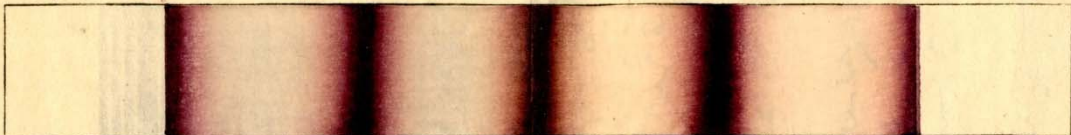
御所様御馬手帳

幅一市

引子一尺二寸

長 八 尺 二 寸 〇 分 〇 厘

引子一尺二寸



貞仲調進

紫綾條

宗尊親王

御手綱也

引兩條

菩提院殿將軍拜賀之時照禪調進之

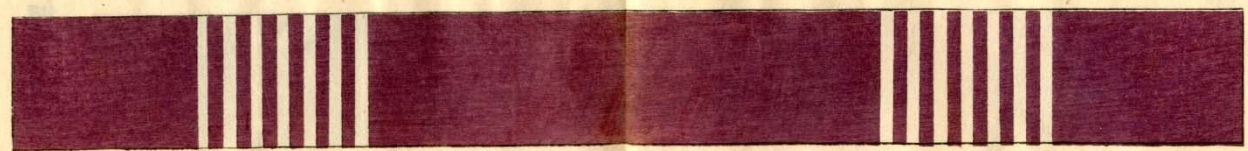
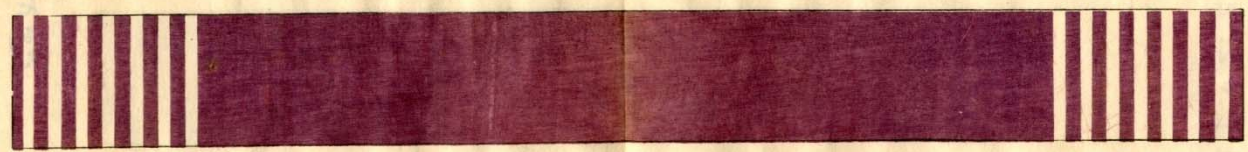
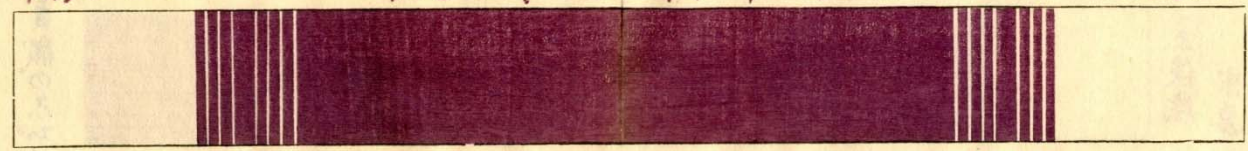
卜申傳也

一
幅

五
寸
二
分

長
九
尺
二
寸
七
分
五
厘
の
位

同
寸
八
分

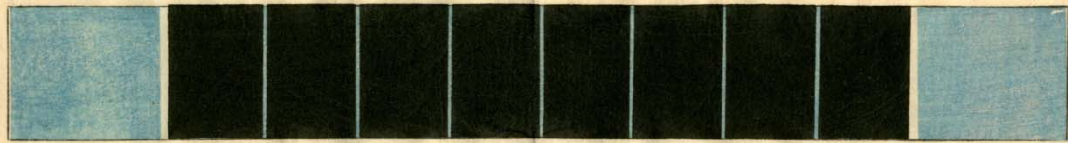
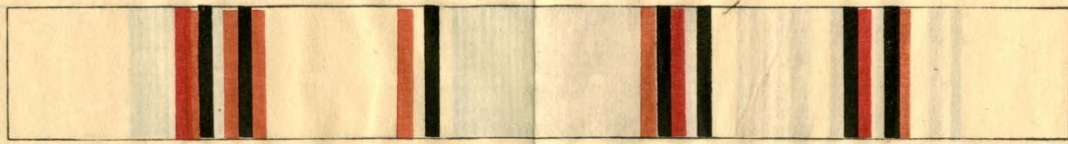


蘇
苑
院
敬
御
時
因
列
願
進

貞藏の志がま

け三の助、貞長のそめられたる

細川武列後領
お



八人、ふくねん、ふくねんの好ふふい

寛永三年正月 日

常安祀之

大正時を略

大連物手綱

布一疋

長

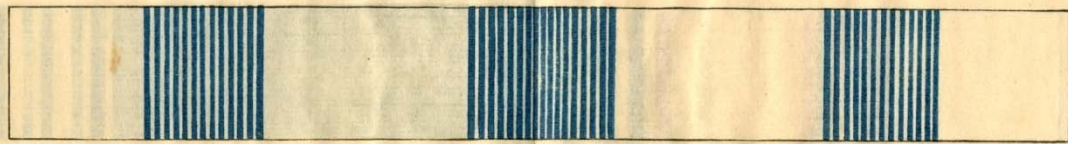
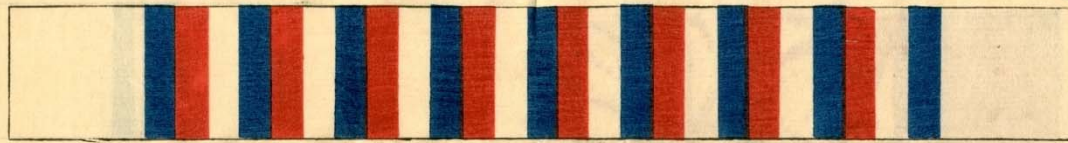
六

尺

七

寸

引子人



不搖教所動聖 貞仲調進



ヒヤウモ手綱遠所往來成也

軍陣手綱

布一丈

二丈

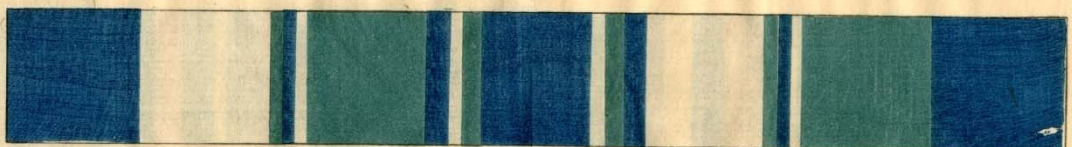
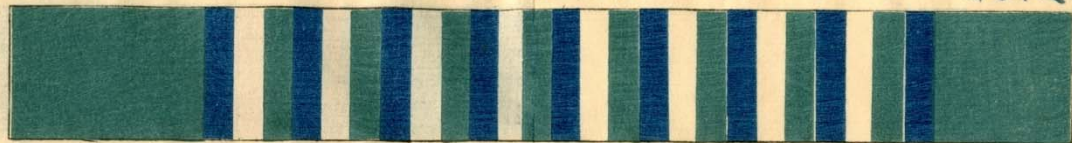
三丈

四丈

五丈

六丈

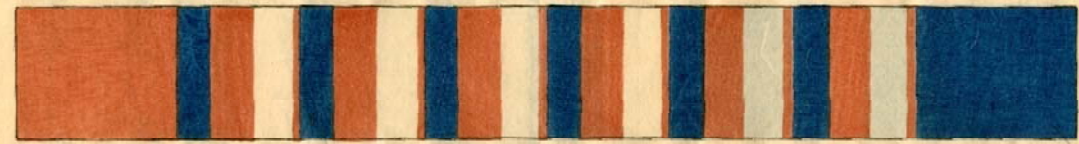
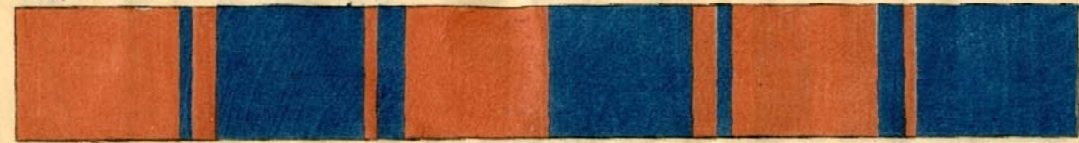
七丈



常山用る手綱

貞宗朝臣の好

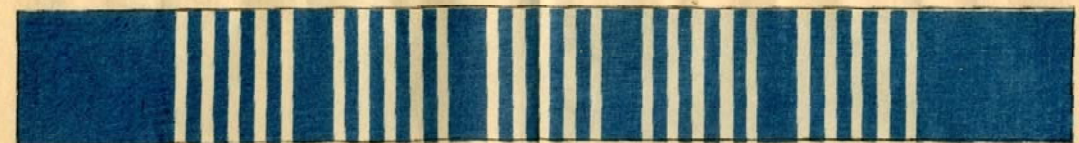
二つやうに 如 二 入 二つやうに



とく深
寸照
法禪



はよを助
手綱貞親
朝臣の好



京都將軍家時子綱腹帯の襟袂熟紙了脱ありて是より此圖式々伊勢國幡守と云ふ所の新子綱を以て諸人の所居するを調へ極平なり杵伊勢氏西流あり所所の熟禮式と云ふを伊勢守と稱院の親紐と綱腹帯以下馬装束の具是を掌すると國幡守と人即大坪道孫入道の人伊勢伊勢も入道照祿の子孫なり靈陽院將軍の時若國幡守ハ即この常安入道なり常安入道父子か一孝子を貞重といふ貞重をなすは核をけるなり相傳の文書頗る教札に紛失するもの多かりしとやある信光故ありて貞重の玄孫貞城の從弟正薰より其家累世

の秘訣を相傳へしかん然門禁あり傳へては傳の書と云ふを校訂し圖々の親紐の大概を録し録し十卷を分ち新院新書といふ次より馬装束の書と校正しんてつは圖式或様ありふとて傳纂を以てしたるを教色や極平たりとてを記しなり天保六年秋七月栗原信光

京都

金花堂



